

地理歴史

世界史 A, 世界史 B

第 1 高等学校教科担当教員の意見・評価

世界史 A

1 前 文

「世界史 A」の受験者数は、共通テスト(1), (2)合わせて1,558名であり、科目選択率は0.4%となっている。第二日程の平均点は43.07点で、「世界史 B」の平均点54.72点とは11.65点の差があり、両者の平均点には開きがある。

以下、問題についての細部にわたる検討は次の観点で行っている。

- ・ 高等学校学習指導要領(以下「学習指導要領」という。)に準拠し科目の目標に適合しているか。
- ・ 教科書の内容に即し、それを逸脱しない出題であるか。
- ・ 世界史の基本的事項の理解と歴史的思考力を評価する適切な問題であるか。
- ・ 問題数・配点や出題の地域別・分野別・時代別のバランスは適切か。
- ・ 問題の難易度・形式・表現などが適切であるか。

2 内容・範囲

(1) 評価の観点

年度・出題数 設問形式	令和3年度	
	出題数	(出題率)
主に知識・技能を評価するもの	27	(81.8 %)
主に思考・判断を評価するもの	6	(18.2 %)
合 計	33	(100.0 %)

(2) 分野別の出題数・出題率

年度・出題数 分野	令和3年度	
	出題数	(出題率)
政治史	26	(78.8 %)
社会経済史	4	(12.1 %)
文化史	2	(6.1 %)
複数分野に関わる	1	(3.0 %)
合 計	33	(100.0 %)

* 知識・技能を評価する問題と思考・判断を評価する問題の分類は、評価・分析委員会の判断による

(3) 時代別の出題数・出題率

年度・出題数 時代	令和3年度	
	出題数	(出題率)
古代史	1	(3.0 %)
中世史	4	(12.1 %)
近世史	7	(21.2 %)
近代史	4	(12.1 %)
現代史	15	(45.5 %)
[うち戦後史]	2	(6.1 %)
複数時代混合	2	(6.1 %)
合 計	33	(100.0 %)

(4) 地域別の出題数・出題率

年度・出題数 地域	令和3年度	
	出題数	(出題率)
西欧・北米	16	(48.5 %)
東欧・ロシア	4	(12.1 %)
東・内陸アジア	9	(27.3 %)
南・東南アジア	4	(12.1 %)
西アジア・アフリカ	0	(0.0 %)
中南米・オセアニア	0	(0.0 %)
複数地域に関わる	0	(0.0 %)
合 計	33	(100.0 %)

中世(5c~14c)・近世(15c~17c)・近代(18c~19c)・現代(20c~)を判断の目安とする。

第 1 問 近世から現代の国際関係

問 1 ケベックの帰属の変化に関し、国名の組合せを問う問題。知識の有無を問うものではあるが、最初の設問であることから受験者に一定の「安心感」を与えたと思われる。

問 2 文中の空欄に文章を埋めさせる問題。ケベックの人々とブール人との共通点を見出させ

るなど一般化させた上で、正しい文章を導き出させる思考と判断が必要となる良問である。

問3 文章と図から読み取れる事柄について述べた二つの文章の、正誤組合せ問題。**あ**が知識と読み取り、**い**が読み取りと読み取りの文章となっているが、いずれも単純な内容で易問であった。読み取りデータなどにもう少し工夫があれば、思考・判断となっただろう。

問4 ピョートル1世についての単純な知識問題。せめて資料文中の「ルーシの古びた地主支配をヨーロッパ流の官僚的秩序に取って代えた」に相当する選択肢を正しいものとして選ばせるなどすれば、若干は資料との関連性も出せたのではないだろうか。

問5 ヨーロッパ史に関する正誤判定の問題。**②④**は誤文、**③**は資料文中の「9世紀に開始された」から年代的に誤りとなるので**①**が正解なのだが、もっと資料読み取り問題にできないか。

問6 二つの資料文を読み取り、それについての解説文の空欄に入る文章などを問う問題。「西欧派」と「スラヴ派」という近代ロシアの二つの流れを示す資料は難易度が高かったと思われる。空欄**エ**を読み取った上で、**オ**の文章による正誤判定は、思考・判断を問う良問であり、やや難しめの設問であった。

問7 文中の事項と文章に当てはまる組合せの問題。「アジア対ヨーロッパの戦い」から**カ**は容易に理解できるが、知識をもとに会話文の内容を読み取ることが求められた。図として提示された「恤兵金受領証」からなにか直接読み取らせる工夫ができれば思考・判断の良問となっただろう。

問8 会話文中の空欄に入れる文章を選択させる問題。問7と連続した問いとなっており、「宗主国」という表現でわずかに抽象的な思考を問うてはいるが、「恤兵金受領証」の陸軍か海軍かを確認するだけで正解できてしまう易問となった。選択肢の工夫が求められる。

問9 会話文中の空欄に入れる文章を選択させる問題。内容を読み取らせながら、スウェーデンの意味を問う良問。

問10 日本が進出した地域についての二文正誤の組合せ問題。細かい知識を問うためやや難しかったと思われる。

問11 下線部で示された内容について正しい文章を選ぶ問題。年代を含めた細かい知識が求められるためやや難しかったと思われる。

問12 下線部の日系アメリカ人の強制収容を行った大統領の事績を選ぶ問題。大統領の特定と、ワグナー法の内容を連続して問うため、やや難しい知識問題であった。

問13 文中で示された内容を踏まえて「その後のアメリカ合衆国の政策や動向」への影響を考察させる問題。資料文の内容把握、設問の把握、年代や日米関係史の知識などを総合的に問う思考・判断の良問。

第2問 近現代の国際経済と人の移動

問1 イギリスの資本輸出先の変化と資本輸出国の国別シェアの読み取りを問う問題。解答に関わる誤文が単純な読み取りと知識問題になっている。3班と4班の分析は興味深く、思考・判断を問うものとなっている。

問2 国内総生産の推移を示す表を読み取る問題。しかし誤りである4班の文章は、データの読み取りではなく年代の知識問題にすぎず、思考を伴うものになっていない。

問3 表から第一次世界大戦を読み取り、その間の出来事を選ぶ問題。結局知識問題となってしまう。中川さんが発言している内容を考えさせるような設問にすべきだったのではないか。

問4 人の移動に関する正誤判定の問題。知識問題であっても、もう少し工夫が欲しい。

問5 文中の空欄に文章を入れる問題。表の読み取りから年代を見て、最終的には知識問題で

あった。

第3問 世界史上の君主

- 問1 宮殿に関連する文章の正誤判定問題。相互に関連性が見られない知識問題。
- 問2 黒杖官の役割読み取りとチャールズ1世に関する知識の組み合わせ問題。読み取りが易問で歴史的な思考力を求めるものではなく、国語力を試すような問題。結果、チャールズ1世に関する二択問題となってしまった。興味深いリード文がほとんど生かされず、大変残念である。
- 問3 イギリス・カナダ・オーストラリアの正誤組合せ問題。単純な知識問題で資料が全く生かされていない。
- 問4 洪武帝と永楽帝を選ばせる知識の組合せ問題。
- 問5 北京についての正誤判定問題。単純な知識を問う設問。リード文との関連は全くなく、大変残念である。
- 問6 文中に入れる文章を選択させる問題。安祿山ではなく「節度使」とあえて概念を使ったところに工夫が見られる。

第4問 世界遺産関連史

- 問1 ゴシック様式を問う語句の穴埋め問題。単純な知識問題である。
- 問2 中世ヨーロッパに関する正誤判定の問題。資料とはほぼ関係のない四択であり、「中世ヨーロッパ」というかなり大きな枠組みでまとめたものなので、出題意図が見えづらい。
- 問3 画家の名前という知識と、絵画の読み取りという組合せ問題。「ダヴィッド」が受験者にはやや細かい知識か。ウに入れる文章は絵画の内容から思考・判断を問う内容。Yの選択肢の文章をもう少し長くするか、人物名をなくして四択にするかすれば良問になったと思われる。
- 問4 空欄に入れる匈奴とその説明の資料文を組合せで選択する問題。知識と資料の読み取りで思考・判断を問う良問。
- 問5 文中の空欄の王朝で起こった出来事を問う四択問題。空欄オである清を考えさせ、その出来事を問うといった二段階の問いのため、受験者にとっては難しかった。
- 問6 長征に関連する毛沢東が直面した苦難を選択させる問題。資料の読み取りにできれば良かったと思われる。
- 問7 コロッセオの写真とフィウメ併合を選択する組合せ問題。写真の読み取りはあるが、キに入れるものを語句ではなく判別のしやすい文章にすれば、思考力を問えたであろう。
- 問8 ミケランジェロを年表の中に位置づける知識問題。ただし、年表の幅が「11世紀 第1回十字軍」と「19世紀 イタリア統一」と800年間もあるため、思考力を問うことは難しい。
- 問9 ムッソリーニ時代のイタリアに関する正誤の組合せ問題。知識問題であり、リード文がまったく生かされていないのは残念。

3 分量・程度

計33問で構成されていた。リード文や資料が多く採用され、小問にも追加の資料が一部で見られるなど出題に工夫をこらした様子がうかがえた。分量としては受験者が時間内に解ききることができるもので、適切であった。

難易度は易問からやや難しめの設問までバランスがとれていたと考える。2はケベックの人々とブル人との共通点を帰納法的に一般化し、理解することが求められる良問であった。6は難易度の高いリード文を読み取りながら、「スラヴ派」の思想背景としてどのような歴史的事象があるのかを考察させる良問である。その際、Zの選択肢を誤文で作成するのではなく正文とすれば、さらに思考力を問うことができたであろう。9はティラクの姿とスワデーシの内容を、会話文を読

み取る中から考えさせる良問であった。[13]は「ライシャワー覚書」の中で述べられている内容を読み取ったうえで、選択肢の中から適切なものを選択させる良問で、年代に基づいた知識をベースに思考・判断を問うものとなっている。[24]は選択肢に固有名詞ではなく①「節度使」、③「人物」などと、ごく基本的ではあるが概念としたところに工夫を感じた。[27]は絵画の読み取りとまではいかないが、その背景となる歴史的な事象を思考させることに成功している。ただし二択では少々物足りない。[28]は匈奴の社会の様子を資料から読み取らせる良問。「移動」と「定住」の部分だけを読み取ればよいものではあるが、「世界史A」という科目から考えて、古代の遊牧世界の様子を考えさせた点で評価したい。

いっぽう課題となる点は、知識の暗記を問う設問が多く見られる点であろう。[1]、[4]、[5]、[10]、[16]、[17]、[19]、[21]、[22]、[23]、[25]、[26]、[33]などがそれに当たる。なかでも[26]は資料文とはほとんど無関係の内容を問うていて、資料の読み取りなどがほとんど考慮されていないのは残念な点である。また、[32]は時間軸における歴史的な位置づけや意味づけを問うことのできる出題方式なのだが、年表の年代間隔があきすぎているため、設問として生徒の思考力を十分に問うものではなくなってしまった。

4 表現・形式

生徒と教師の会話やグラフ、そして文字資料などの工夫が随所に見られた点は評価したいが、それが十分機能したかと言えば疑問符がつく。第1問のCではティラクの「恤兵金受領証」という興味深い資料が提示されたが、その読み取りはほとんどなされなかった。教師と生徒との会話文の中で、この資料の読み解きをしてゆくという形式にすれば、資料を生かすことができたのではないだろうか。また、第2問のAでも多くのグラフや表が提示されているが、教師と生徒との会話文の設定が不明瞭で、会話文が必要であったのか？と疑問符がついた。同じ第2問のBの問5のように、生徒が疑問や気付きを出しながら、教師が説明する部分を穴にして思考させる、という形式の方が良いだろう。第3問のA・Bのリード文、第4問のBで提示された二枚の写真と会話文なども十分生かされたとは言い難い。生徒による調べ学習を想定した仮説の提示など、学びの場面を意識した出題がもっとなされると良かったのではないだろうか。なお、大問4の冒頭でノートルダム大聖堂の火災という時事問題を使用したのは新鮮であった。

5 まとめ（総括的な評価）

知識問題と思考・判断の問題について。受験者が少ないので正確なことは分からないが、知識問題の方が得点率が低いという傾向が見られる。これは、知っているか知らないかの知識問題よりも、資料やグラフなどから読み取ったことを基に考察する設問の方が、点を取りやすかったということの証明となろう。この点は受験者と高校の教員に対する暗黙のメッセージになると考える。つまり、大学入試センターが教科書内容に即した基本的な知識をもとに、様々な資料の読み取り問題を出題することになれば、高校生の学びへの姿勢や、高校の教員の授業プランなどが大きく変わる可能性があるだろう。ただし、第2問や第3問のように、せっかく資料を多く提示しても、それをほとんど生かすことなく単純な知識問題に帰結してしまうような問題作成は避けて欲しい。歴史学の学問的な手法である、資料→仮説→資料への立ち戻り→仮説の修正→叙述というプロセスを部分的であっても追体験できるような設問が望ましい。リード文や資料をきちんと読み込めば、そこに様々な思考のヒントが含まれているという出題を是非お願いしたいと考える。

最後になったが、様々な要因に目配りしつつ、多様な受験者にも対応しうる入試問題の作成に心を配り、多大なエネルギーを使って作題された皆様の御苦勞に感謝申し上げます。

世界史B

1 前 文

共通テスト(2)における「世界史B」の受験者数は305名で、共通テスト(1)を含めた「世界史B」の全受験者数(85,995名)の0.35%に相当する。共通テスト(2)の「世界史B」の平均点は54.72点で、共通テスト(1)の「世界史B」の平均点63.49点とは8.77点の差があった。

以下、問題についての細部にわたる検討は、「世界史A」と同様の観点で行っている。

2 内容・範囲

(1) 評価の観点

設問形式	令和3年度	
	出題数	(出題率)
主に知識・技能を評価するもの	26	(78.8 %)
主に思考・判断を評価するもの	7	(21.2 %)
合 計	33	(100.0 %)

(2) 分野別の出題数・出題率

分野	令和3年度	
	出題数	(出題率)
政治史	19	(57.6 %)
社会経済史	9	(27.3 %)
文化史	5	(15.2 %)
複数分野に関わる	0	(0.0 %)
合 計	33	(100.0 %)

* 知識・技能を評価する問題と思考・判断を評価する問題の分類は、外部評価分科会の判断による

(3) 時代別の出題数・出題率

時代	令和3年度	
	出題数	(出題率)
古代史	6	(18.2 %)
中世史	2	(6.1 %)
近世史	5	(15.2 %)
近代史	7	(21.2 %)
現代史	10	(30.3 %)
[うち戦後史]	3	(9.1 %)
複数時代混合	3	(9.1 %)
合 計	33	(100.0 %)

(4) 地域別の出題数・出題率

地域	令和3年度	
	出題数	(出題率)
西欧・北米	8	(24.2 %)
東欧・ロシア	2	(6.1 %)
東・内陸アジア	7	(21.2 %)
南・東南アジア	3	(9.1 %)
西アジア・アフリカ	6	(18.2 %)
中南米・オセアニア	2	(6.1 %)
複数地域に関わる	5	(15.2 %)
合 計	33	(100.0 %)

中世(5c~14c)・近世(15c~17c)・近代(18c~19c)・現代(20c~)を判断の目安とする。

第1問 世界史上の植民地

問1 生徒の作成したメモが対象としている国の位置を地図から選択する問題。複数のメモから国を特定する過程を要するが、基本的には知識の有無を問う問題である。

問2 メモに示された国の特徴と、設問で提示された国の共通性を答える問題。後者の国の特徴を考え、それをメモで示された国の特徴と対比して共通点を探すという思考過程が必要であり、良問である。

問3 選択肢が示す国がどこかを判断し、その判断と地図の情報を突き合わせて「ある国」を確定させる問題。最初に選択肢の検討が必要とされる、従来には見られなかった形式の問題である。

問4 東南アジアの植民地に関して、適切な文を選択する問題。「パン=ヨーロッパ」の定義をリード文と地図から理解したうえで、知識と地図の読み取りで解答できる問題。

問5 南アジア諸国と「パン=ヨーロッパ」に関して、適切な文を選択する問題。南アジア諸国がイギリスの植民地であったという知識によって解答できる問題。

問6 奴隷貿易に関する資料から読み取った内容と、奴隷制度の拡大に関する事項との正しい組み合わせを選択する問題。資料の読み取りは平易で、奴隷制の拡大に関する知識のみで解答で

きる。

問7 シンガポールの歴史について、適切な文を選択する問題。戦後史に関する知識を問う従来型の問題。

第2問 世界史上の工業・産業の変化

問1 世界の工業生産における各地域のシェアを示すグラフと会話文に関して、空欄に適する語句を選択する問題。単純なグラフの読み取り問題になっており、出題形式により一層の工夫を求めたい。

問2 第二次産業革命を象徴する技術を選択する問題。写真が添付されているが、キャプションの情報のみで解答可能な問題。

問3 19世紀の鉄道に関する表と会話文に関して、会話文中の空欄に適する語句の正しい組合せを答える問題。一般的な関税同盟の性格を、当時のドイツの歴史的状況に照らして考えないと正解できないように作られており、思考力を評価する良問である。

問4 生徒がまとめたパネルの正誤を答える問題。複数の知識を前提として表を読み取る必要がある良問であるが、選択肢のつくり方に工夫がほしい。

第3問 世界史におけるグローバルな接触や交流

問1 メキシコ高原に誕生した文明について正しい文を選択する問題。古代アメリカ文明に関する基本的な知識を問う従来型の問題である。

問2 会話文の空欄に適する作物名を選択する問題。新大陸原産の作物は、コロンブスのアメリカ到達と世界の一体化で扱う内容であるが、選択肢で挙げられた作物がやや判断に迷うものがあり、難問となった。

問3 会話文の空欄に適する国に関する正しい文を選択する問題。国名を空欄で伏せてあるが、「ジャガイモ飢饉」からアイルランドであることは明白であり、従来型の知識を問う問題である。

問4 エンリケ3世に関する会話文の空欄に適する語句の正しい組合せを問う問題。会話文の前におかれた説明文に示された時代と国名の情報で解答できる問題であり、会話の文脈を読み取る必要がないので、出題に工夫を要する。

問5 会話文の空欄に適する中国王朝に関する正しい文を選択する問題。伏せてある王朝は会話文の説明に示されている情報で確定できるので、その王朝に関する知識を問う問題になっている。

第4問 世界史上の指導者や君主の言葉

問1 資料の記述内容の全体を把握したうえで、歴史的知識と照らして適切な説明を選ぶという思考を要する問題。

問2 資料中の空欄に適する語句と、資料の著者が誇っている事柄として文との正しい組合せを選択する問題。資料の著者が、ローマ人の組織や習慣を誇っているという判断を必要とする。

問3 エチオピアとアラビア半島南部に関する知識を問う問題。受験者になじみのない地域を扱っているのに加え、経済史に関する選択肢が多く、判断に迷った者が多かったと思われる。

問4 資料に関する生徒の発言の正誤を答える問題。会話文の内容の正誤を問う形式であるが、ドイツとフランスに関する知識を問う問題となっている。

問5 君主・王朝による宗教の迫害や保護に関する正しい文を選択する問題。資料の内容とは関係のない設問になっており、出題に関しての工夫を求めたい。

問6 資料中の空欄と、2つの資料の趣旨との正しい組合せを答える問題。2つの資料の文脈

把握と歴史的知識を総合して答えなければならない良問である。

問7 資料に関する説明文中の空欄に適する語句と、資料から読み取れる事項との正しい組合せを答える問題。読み取れる事項はほぼそのまま資料中に示されている。

問8 中国文化に関する正しい文を選択する問題。従来型の知識を問う問題である。

問9 資料中の空欄に適する国家に関する正しい文を選択する問題。資料の内容や空欄に関係なく、選択肢と地図のみで解答できる問題になっている。出題についての工夫を求めたい。

第5問 世界史上の国際関係

問1 戦後の中東地域の紛争に関する文が、古いものから順に正しく配列されている選択肢を選ぶ問題。資料の内容にかかわらず、選択肢の内容だけで順序を判断する、知識を問う問題。

問2 資料中の空欄に適する都市に関する正しい文を選択する問題。資料の解説文から、資料中の空欄に適する都市がイェルサレムであることは明白なので、従来型の知識を問う設問である。

問3 資料の解説文中の空欄に適する人物に関する正しい文を選択する問題。資料と解説文から空欄の人物を特定したうえで、王朝名が明記されていない選択肢から正しい文を判断するという思考過程を必要とする。

問4 資料が示している国名と、解説文中の空欄に適するその国の特徴の正しい組合せを選択する問題。設問文で示された資料中にあるキーワードによって国名と特徴を確定することができるという知識問題。

問5 風刺画中の人物と、その人物が中国皇帝に要求した内容との正しい組合せを選択する問題。設問文にある情報のみで解答可能であり、風刺画を読み解く工夫がほしかった。また、選択肢の「マカートニー」と「アマースト」を区別させるのはやや細かい知識であろう。

問6 会話文中の空欄に適する生徒の発言を選択する問題。空欄の直前の記述が時代を限定しているので、基本的にはその時代の知識を問う問題となっている。

問7 会話文中の空欄に適する語句と文との正しい組合せを選択する問題。「ミュンヘン会談」・「ズデーテン地方」・「宥和政策」というキーワードで解答可能な知識問題。

問8 対ソ干渉戦争時にソ連が採用した政策に関する正しい文を選択する問題。従来型の知識を問う問題。

3 分量・程度

計33問の出題において、扱っている時代や地域に関しては、例えば中世史が少ないなどの多少のばらつきがみられるが、これは資料やそれに関しての解説や討論、統計を利用した授業などの形式によって問題作成されているという性格上やむを得ないことであろう。問題の読解に時間はかかるが、60分の試験時間で十分対応可能な分量となっている。

難易度は標準的であり、大学入学希望者の学力を評価する問題として適切である。**2**はリベリアと南アフリカ共和国という2つの国の個別の歴史的な性格から、その共通点を導き出す問題、**10**は関税同盟の性格を、ドイツ史の中に具体的に位置付けて考える問題であった。つまり、**2**は個別具体的な知識を共通点という形で一般化することが、また**10**は一般的な概念を具体的な歴史事象に対応させることが必要とされ、思考のプロセスを適切に評価することができる良問であった。また**22**は、演説内容を示した2つの資料の文脈全体を捉えたうえで、第二次大戦中のフランスに関する知識に基づき解答しなければならないという意味で、歴史的知識と資料読み取りの技能を評価する良問であろう。一方で、**8**はグラフの読み取りだけで解答可能で、歴史的知識を必要としない問題となっているので、何らかの工夫をお願いしたい。また、大問5のAでは、パレスチナ分

割に関わる資料と会話が、資料中の空欄に「イェルサレム」を答えさせるためだけに使われているが、これではパレスチナ分割に関する決議文を資料として提示している意味がない。また、**30**は、風刺画から使節と皇帝が会見しているという情報を読み取ったうえで解答するという形式にすれば、資料を活用する設問になり得たのではないだろうか。資料を利用しての作問は簡単なことではないのを承知の上で、より効果的な出題の在り方を考慮していただきたい。

4 表現・形式

第2問ではグラフや表による統計資料を使って行われる授業を想定している。統計の読み取りや解釈に基づく生徒と教員の会話により、問題を解く側の思考の方向を示す形式で問題作成されている。特にBの鉄道の歴史に関する出題は、表、会話、設問相互の関係を考慮しながら解答する必要があり、出題形式と内容が適切に構成されている良い例である。それだけに、同じ大問のAのグラフを使った問題が単純な読み取りと知識を問うものになっていたのが惜まれる。

第3問はA、Bともに生徒と教員の会話で構成されているが、それぞれのテーマを会話の形式にする必然性が感じられない。今回の大学入学共通テストでは、学びの場面を重視して問題作成がなされているのは理解できるが、無理やり会話文にしなくても、生徒の思考を促す問題作成は可能だと考える。善処を期待したい。

さらに、文献資料も数多く取り上げられていた。出題形式としては、資料内容の読み取りと、資料に関する歴史的知識の正しい組合せを解答するものが目立った(**6**, **18**, **22**, **23**)。資料内容の読み取りの部分は、歴史的知識を必要としないものになっている場合が多いが、その中で**18**は資料の読み取りと歴史的知識を総合して判断しなければならない良い出題例となっている。

5 ま と め (総括的な評価)

本年度の共通テスト(2)における「世界史B」は、「学習指導要領」における「世界史B」の目標に照らし合わせて、地域や時代等のバランス、問題の難易度、出題の形式といった面から適切な問題であった。初の大学入学共通テストとなり、従来までの大学入試センター試験の「世界史B」の出題形式とは大きく異なるものとなっている。多くの文献資料や統計資料が使用されるなどの題材面の変化に加え、風刺画などの図像資料や授業場面を想定した会話文などが活用されたことで、題材となった資料や会話文を読み込まないと解答できない問題が中心となったことは大いに評価したい。一方で資料や会話文を利用することが優先され、それらが世界史の学力を評価する設問として有効に機能していないものも散見された。この点は今後の課題として修正していただきたい。

今回、評価・分析委員会では、各設問を「知識・技能」「思考・判断」の2つに分類して分析を行った。特に「思考・判断」については、委員会の合意として、「資料内の文脈や、全体を通しての意図などを捉える必要のある問題」、「既習の知識を活用しながら、その資料の背景などを読み取る問題」、「複数の既習知識を結び付けながら、歴史像の具体化や抽象化、概念化を行わせる問題」という3つの視点に基づき分析を行った。一方で、資料を熟読せずともキーワードによって正答が連想することができる問題や、資料に書かかれていることがそのまま正答となる単純な読み取り技能問題は、資料を利用していても「知識・技能」を評価する問題とした。今回の出題によって、高校での世界史学習の現場では、様々な資料を題材として授業を展開する機会が確実に増えることになるだろう。資料に即して歴史を叙述し、資料を利用して歴史を考える新たな視点に気が付くことの重要性が、メッセージとして学びの場に届くことを期待したい。

最後に、問題作成に当たり、多くの困難の中、新たな試験の作成にご尽力いただいた委員の皆さまに感謝申し上げたい。

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 全国歴史教育研究協議会

(代表者 川瀬 徹 会員数 約16,200人)

T E L 042-392-1235

今年度より、従来の大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）にかわり、大学入学共通テスト（以下「共通テスト」とする）が始まった。両者を比較しつつ、大学入学共通テスト問題作成方針を参照しながら、高等学校において授業を行う立場から、1の「はじめに」では共通テスト(2)「世界史A」と「世界史B」の全般的な概略について、2の「試験問題の程度・設問数・配点・形式等」では問題の内容・程度・設問数・配点・形式などの科目別の意見や要望について、3の「まとめ」では全体的な要望について述べる。

1 はじめに

今年度、共通テストの分析を終えてみて、これまでと同じく問題の内容やレベルともに教科書に準拠しており、日常の授業で対応できる内容になっており、共通テストとして極めて妥当であると考えられる。出題形式に関しても、設問文だけで答えが導き出せる「基礎的な知識及び技能」に偏った出題を脱却しようという試みが見られることに敬意を表したい。

「思考力・判断力・表現力その他の能力」を問う出題は、それ自体では難しいかもしれないが、高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という。）の地理歴史科の目標は、「我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての理解と認識を深め、国際社会に主体的に生きる民主的、平和的な国家・社会の一員として必要な自覚と資質を養う。」とあり、「世界史A」の目標は、「近現代史を中心とする世界の歴史を、我が国の歴史と関連付けながら理解させ、人類の課題を多角的に考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質を養う。」とある。また、「世界史B」は、「世界の歴史の大きな枠組みと流れを、我が国の歴史と関連付けながら理解させ、文化の多様性と現代世界の特質を広い視野から考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質を養う。」とある。

今回の出題方針にある「歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず、歴史的事象の意味や意義、特色や相互の関連等について、総合的に考察する力を求める。問題の作成に当たっては、事象に関する深い理解に基づいて、例えば、教科書等で扱われていない初見の資料であっても、そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題、仮説を立て、資料に基づいて根拠を示したり、検証したりする問題や、歴史の展開を考察したり、時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題などを含めて検討する」という視点が、実際の作問においてどのように反映されているかということについて、大いに期待するところであった。リード文やそれに付属する図表を精読することでしか解けない出題が今後増えていくことによって、知識・理解だけでなく資料活用能力を見る設問も増加し、単なる暗記物に終わらない高校世界史の本格的な授業が高校の現場で実現できることを期待している私たちからは、共通テストが大学入試問題の一方の頂点に立つべく、更なる御検討をお願いする次第である。

以下、今年度の「世界史A」と「世界史B」の共通テスト問題について、限られた紙面の中では

あるが、今後の御検討の一助になることを期待して、本協議会の意見と評価を記す。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

(1) 「世界史A」について

大問数4問、小問数33問構成。共通テスト(1)の大問数は5問であったが、小問数は同じ33問となっている。試験時間は60分間で、配点は100点満点である。

出題を正解の選択肢を基に判断すると(以下同じ)、問題の出題形式における内訳は、以下の通りである。正文選択問題が7問、誤文選択問題が4問、2文正誤問題が5問、空所補充問題が12問(空所一つを補充する問題が7問・空所二つを補充する問題が5問)、空所補充問と正文選択とを組み合わせる新しい形式の問題が3問、年号・年代に関する問題が2問である。上記の問題のうち、資料から得られる情報を正確に読み解かなければ、正答に辿り着けない問題が8問出題され、統計や数値データに関する資料も5種類使用された。また、会話文形式の問題で、先生が生徒の資料の読み取りの誤りを指摘し、その誤りを含む発表内容を選択するという新傾向の問題も出題された。尚、地図問題の出題なかった。問題文や資料などが正答に直結する問題が多く、この点は旧センター試験の問題とは大きく異なると言える。教科書などでは扱われていない資料の情報を授業で学んだ知識と関連付ける問題や生徒の発表内容を資料に基づいて検証する問題など、思考力や判断力を問う出題も増加している。問題全体の難易度は、地域的な偏りが若干あるものの、基礎的な学習の到達程度を幅広く問う標準的な問題となっている。

出題範囲(分野や時期)について。分野別の出題は政治・外交史が32問、社会・経済史が6問、文化史が4問である。出題時期に関しては、古代史及び中世史に関わる問題が10問、16世紀から18世紀に関わる問題が7問、19世紀に関わる問題が6問、20世紀に関わる問題が19問となっている(2文正誤問題など二つの答えを組み合わせる問題の解答を含む為、小問数を超える)。世界史Aの目標にある「近現代史を中心とする世界の歴史」という観点からみると、古代史及び中世史に関わる問題が25%程度盛り込まれているのは、旧センター試験と同様とは言え、若干多い印象を受ける。また、解答が直接21世紀に関わる出題はなかった。地域別にみると、ヨーロッパに関連する問題が21問と一番多く、中国・日本・東南アジアを含むアジア史・インド史は16問、北米に関連する問題が4問、アフリカに関する問題が1問となった。他方で、中東イスラーム圏に関する問題、中南米に関する問題は出題されず、若干偏った出題傾向となった。

第1問 国際関係について

Aの問題文は、ケベックにおけるカナダの戦争への参加のあり方をめぐる議論についてとなっており、徴兵制をめぐる国民投票の結果についての資料が掲載されている。

問1は、パリ条約によってケベックの領有権がフランスからイギリスへ移行したことを問う問題。

問2は、ブール人が南アフリカ戦争に敗れ、イギリスの支配を受けたという語句を選ぶ問題。ブール人の呼称に、「アフリカーナー」を併記していない点が憂慮される。

問3は、2文正誤問題で、「あ」の文は第二次世界大戦期のフランスに関する知識を問うているが、「い」の文はケベックが伝統を保持し続けた点を問題文から読み解くことが出来るかを問う問題。

Bの問題では、19世紀中葉のロシアの思想家たちの議論を資料1・資料2として掲載している。

問4は、資料1に名のあるピョートル1世の事績として誤っているものを選ぶ問題。問4は、消去法によって『世界史用語集』にも収録のない大黒屋光太夫を選ばせる問題であるが、共通

テストの出題としては疑問を感じさせる形式である。

問5は資料2にある9世紀から19世紀の出来事を選ぶ年号・年代を問う問題。年代を問う問題であるにも拘らず、二つの選択肢が年代は異なるが内容は正しい文ではなく、年代は合っているが内容に誤りを含む文となっていた。年代を問う問題では、年代は異なるが文の内容は正しい選択肢で揃えなければ、何を問いたいのかが見え辛くなると思われる。

問6は、資料1と資料2の立場の違いについてまとめた解説文中の二つの空所を補充する組み合わせ問題。空欄「エ」は両資料の立場を読み解き、空欄「オ」は19世紀前半のロシアに関する出来事を選ぶ年代問題である。問5と同じく、「オ」の選択肢には、年代は異なるが内容は正しい選択肢と年代は19世紀の事柄であるが内容に誤りを含む選択肢が混在してしまっている。Cの問題では、資料として、ティラクが日本へ送った寄付の受領証と、この資料に関する先生と生徒との会話文が掲載されている。

問7は、会話文の内容から空欄に日露戦争と入れ、更に、ティラクの政治的姿勢についての正文を選ぶ組み合わせ問題。

問8は、先ずインドの宗主国をイギリスと特定し、イギリスとロシアとの関係性を答え、更に、資料の受領証から寄付が日本海軍へなされたものであることを読み解いて答える問題。

問9は、先生のティラクに関する説明と「スワデーシ」というキーワードからティラクの姿勢を選ぶ問題。

Dの問題では、ライシャワーの「対日本政策についての覚書」が掲載されている。

問10は、「覚書」中の下線部を読んだ上で、「日本が進出した地域」についての2文正誤問題。「あ」は誤文であるが、問題のある内容となっている。先ず、日本のポツダム宣言の受諾（1945年8月14日）とホーチミンのベトナム独立（1945年9月2日）という一か月もないタイムラグを問うている点。次いで、「ベトナム」とは何を指しているのかが不明確（恐らくは「ベトナム民主共和国」のことと推察される）。更に、「独立が実現した」というのも「独立を宣言」とはなっておらず、その後のベトナム史の展開を考えると、何を以て独立が「実現」したと言えるのか極めて曖昧である。また、「い」の「日本軍がニューギニアまで進出した」というのも、「進出」という表現が曖昧であり、且つ「ニューギニア島」とは表記されておらず、不正確。尚、日本軍のニューギニア「島」進出については『世界史用語集』には収録されていない。資料集の太平洋戦争の地図には当然掲載されているが、ニューギニア「島」の全域が日本軍の最大進出地域には入っていない点も気になる。

問11は、汪兆銘政権を問う問題。

問12は、日系アメリカ市民の強制収容を命じた大統領、即ち、フランクリン＝ローズヴェルトの事績を選ぶ問題。問13は、「覚書」中の提言を読み解き、この提言の影響が表れていると考えられる「資料」？を選ぶ問題。下線部をよく読めば正答に辿り着けると思われるが、この「資料」を選ぶという文言がわかり辛い。実際の資料が掲載されてはおらず、「(に際して)・(制定過程で)・(するために)作成された資料」という資料の概要説明らしき文言の選択肢が四つあるのみである。

第2問 資料を用いた授業について

Aの問題では、1870年と1914年のイギリスの資本輸出と1914年の資本輸出の国別シェア、各国の国内総生産の推移についての統計資料をもとにした班別学習が題材とされている。

問1, 問2共、資料についての各班の発表内容を読み解き、誤りがある発表内容を選ぶという新しい形式の問題。各班の発表内容の正誤の判断については、資料の数値を読み解いて判断するものと、年号によって判断するものが混在している。

Bの問題では、上海共同租界の外国籍人口の推移についての表をもとにした先生と生徒との会話文が題材とされている。問3は、先ず空欄ウの戦争を表中の数値から第一次世界大戦と特定した上で、第一次世界大戦中の出来事を選ぶ年号・年代に関する問題。

問4は、人の移動についての誤文を選ぶ問題。ベトナムのドンズー（東遊）運動が問われている。

問5は、問3同様に表中の数値を読み解き、年代を特定した上で、同時期の出来事を選ぶ年号・年代に関する問題。

第3問 世界史上の君主について

Aの問題文は、イギリス議会と黒杖官についてとなっている。

問1は、宮殿に関する誤文選択問題。

問2は、問題文から黒杖官の役割を読み取った上で、チャールズ1世に関する出来事の二つを組み合わせる問題。問3は、イギリス・カナダ・オーストラリアの三国の歴史についての2文正誤問題。

Bの問題文では、中国の君主の呼び名についての先生と生徒との会話文が題材とされている。

問4は、二つの空欄に当てはまる皇帝の通称の組み合わせを選択する問題。

問5は、問4で空欄イを永楽帝と選んだ上で、永楽帝が北京へ遷都したという知識をもとに、その北京について述べた正文を選ぶ問題。手順の多い問題となっている。

問6は、会話文中にある李隆基、つまり玄宗年間に起きた出来事を選ぶ問題。

第4問 世界遺産について

Aの問題文は、2019年に火災に遭ったノートルダム大聖堂についてとなっている。ノートルダム大聖堂についての生徒のメモが2種類掲載されている。

問1は、ノートルダム大聖堂の建築様式を問う問題。

問2は、中世ヨーロッパについての誤文選択問題。「中世ヨーロッパ」のように期間を年号でとれない範囲の出来事を問うことに抑々問題があるが、選択肢も、全て年号がとれない内容となっている。しかも、誤文（正答）は、年代は異なるが内容は正しい文ではなく、年代は同じだが内容に誤りを含む文となっている。共通テストはこのような選択肢の構成を可としているようだが、何を問いたいのかが見え辛くなるように思われる。

問3は、メモ2中の絵画の画像から空欄イにダヴィッドと入れた上で、この絵画の背景となったナポレオンの動きを空欄ウに入れる組み合わせ問題。

Bの問題では、長城の写真1と八達嶺にある毛沢東の言葉が刻まれた碑の写真2（逆光で非常に見辛い）を題材にした先生と生徒との会話文が掲載されている。

問4は、先ず、空欄エに匈奴と入れた上で、匈奴の暮らしぶりを述べた資料を選択する組み合わせ問題。

問5は、空欄オに清と入れた上で、清の時代に起きた出来事を選ぶ問題。問6は、長征中に毛沢東が直面した苦難を選ぶ問題。

Cの問題文は、都市ローマとムッソリーニについてとなっている。

問7は、問題文中の二つの空欄に適語を入れる組み合わせ問題。空欄カは、コロッセウムとパルテノン神殿の写真から、ローマの巨大建築を選ぶ。空欄キは、ムッソリーニが併合した北イタリア国境付近の都市フィウメを選ぶ問題。

問8は、旧センター試験の問題によくみられた年表問題。問9は、ムッソリーニ時代のイタリアに関する2文正誤問題。

(2) 「世界史B」について

大問が5問で、それぞれ学習指導要領を反映したテーマ設定がなされている。大問ごとの設問数にはばらつきがあり、多いもので9問、少ないものでは4問であった。

出題を正解となる選択肢の内容に即して年代別に見ると、古代が8問、中世～近世が9問、近代が12問、現代が4問、複数の時代区分にまたがる設問が3問であった。センター試験と異なり、資料活用型の設問が大半を占めるためか、資料が豊富な近代以降の設問が18問と半数以上を占め、正答となる選択肢を基準に地域別の設問数を見ても、ヨーロッパと東アジアの設問が全体の3分の2を占めるものとなった。資料の制約があることは理解できるが、世界史Bが全世界のことを通史的に広く扱う教科であることを鑑みるに、こうした設問の偏りについては、改善の余地があると思われる。

出題形式でみると、4文選択が17問、地図問題が1問、語句選択（誤り選び）および語句の組み合わせが2問、年代整序が1問、図版からの選択が1問、生徒の意見やパネルを選ぶものが2問、語句と文、もしくは文と文の組み合わせが9問である。試行調査で出題されていた連動型の設問や、センター試験で見られた2文正誤の設問はなく、4文選択問題においても、用語自体の正誤を問うのではなく、歴史的な脈の中で事象を正しく理解しているかを問うものが多くみられた。

第1問 世界史上の植民地について

Aは、あるアフリカの国の歴史についての授業を想定した設問。

問1は生徒のメモを要約したものから、それがアフリカのどこの国かを地図上から選択させる問題。基本的な内容。

問2はある国と南アフリカ共和国との共通点を判断させる問題。現代史の授業に割ける時間は決して多くはなく、①～④から、南アフリカとの共通点を見出すことはやや難しいか。

Bはクーデンホフ＝カレルギーの『パン＝ヨーロッパ論』を題材とした設問。

問3は「パン＝ヨーロッパ」に含まれない地域とその理由を判断する設問。1923年という年代を鍵として、選択肢を判断していく問題は興味深い、実質2択となっているのが惜しまれる。

問4は東南アジアの植民地と「パン＝ヨーロッパ」の領域との関連について問う問題。若干地理的な要素が強いきらいはあるが、難しい設問ではない。

問5は南アジアがいずれのブロックに含まれるのかを判定する問題。視点を変えて、高校での既習事項の定着を確認する良問であろう。

Cはアブドゥッラー＝アブドゥル＝カディールの文章からの設問。

問6は奴隷売買についてのラッフルズの考えと、奴隷制拡大をもたらした出来事についての組み合わせ問題。リード文を素直に読めばラッフルズは奴隷売買に否定的であると判断できるが、リード文の最後は「あのような邪悪な商売が行われているのは、ここだけではないのだ。イギリスにも、他の国々から人間が船で運ばれてきているのだ。」となっている。ここから、複数の国・地域で奴隷売買が継続されているのだから、イギリスもまだ継続すべきであるとラッフルズが考えていなかったかといえ、この文章からは判断できない部分もある。

問7はシンガポール近現代史の4文選択で、基本的な内容。

第2問 世界史上の工業・産業の変化について

Aは18世紀半ばから20世紀前半にかけての世界の工業生産シェアのグラフについての教師と生徒の議論からの出題。

問1は生徒と教師の会話文中の空欄に当てはまる語句の組み合わせ問題。グラフからの読み取

りで解答は容易。

問2は第二次産業革命を象徴する図版の選択問題で、これまでにない形式の出題だが、せっかくグラフを提示しているのに、読み取り問題が歴史的思考力を問うものではないのが惜しまれる。

Bは鉄道の営業距離に関する統計資料を活用した授業を想定した問題。

問3は会話文中の空欄の組み合わせ問題。19世紀のヨーロッパ史を鉄道という視点から考えさせるのは良い。

問4は統計資料をまとめた生徒のパネルについての正誤判定問題だが、問われていることは基本的な内容。第2問は小問が4問のみで、Aの資料とBの資料の問題がそれぞれ独立しているが、これらを組み合わせた問題をCパートとして出題しても良かったのではないか。

第3問 世界史におけるグローバルな接触や交流について

Aは生徒の教師の古代史に関する会話文からの出題。

問1はメキシコ高原に成立した文明についての4文選択問題。

問2は会話文中の空欄に当てはまらないものを選ぶ問題。いずれも易問といえる。

問3は空欄イに当てはまる国名を判断したうえで、その国の出来事を選ぶ4文選択問題。空欄イの判断が容易なため、解答は容易である。選択肢のうち2つがイギリスの出来事となっているが、アイルランドとイギリスのどちらかを受験者に問うのであれば、アイルランド以外の選択肢はすべてイギリスにすればよいし、逆に、ヨーロッパのどこの国かを判断させるのであれば、オランダについての選択肢などを入れても良かったのではないか。

Bは、エンリケ3世の事績に関する生徒と教師の会話文からの出題。リード文中のクラビホについて、それが人物名なのか役職名なのか判断に迷う生徒もいたのではないか。

問4は空欄に入れる語句・文の組み合わせ問題。

問5は空欄オに当てはまる王朝を判断したうえで、その王朝の歴史について正文を選択する問題。問4、問5ともに基本的な内容である。

第4問 世界史上の君主や指導者の言葉について

Aは、オクタウィアヌスの業績録からの出題。

問1はAがアウグストゥスのことだと判断すれば解答できる。

問2はリード文中の空欄と、資料の引用部分において著者が業績として誇っているものの組み合わせ問題、問3は1世紀頃のエチオピアとアラビア半島に関する4文正誤問題で、いずれも解答は容易である。

Bはフランスのシラク大統領の演説（1995）をもとにした授業を想定した問題。

問4は生徒の発言についての正誤判定問題で、基本的な内容である。

問5は君主・王朝による宗教の迫害の歴史についての誤文選択問題だが、リード文とは全く関係のない前近代に関する設問となっている。資料の制約の都合から前近代の出題が少ないとの判断からの設問だろうが、もう少しリード文と関連させた出題が望ましい。

問6は空欄補充とシラクの演説の趣旨との組合せを解答する問題。資料からの読み取り想定しているのだろうが、一国の大統領ともあろうものがYに示されるようなことを演説で言うはずがないということは、さすがに受験者なら判断できてしまうのではないか。

Cは訓民正音（ハングル）制定に関する解説冊子の序文と、制定に対する反対意見からの出題。

問7は空欄と読み取れる内容の組み合わせだが、読み取りが単純なものなので、解答は容易である。

問8は中国の文化についての4文選択問題。基本的な内容。

問9は資料中の空欄に当てはまる国家の位置とその説明についての組み合わせ問題だが、ターゲットと限定されているので、解答は難しくない。

第5問 世界史上の国際関係について

Aは、パレスチナ分割に関する国連決議をふまえた大学生の発表を想定した設問。

問1は中東戦争に関する年代整序問題。基本的な内容である。

問2は空欄の都市の歴史についての4文正誤問題。基本的な内容である。問2の空欄に当てはまる都市がエルサレムであることは明白で、わざわざ空欄にするまでもないのではないか。

Bは、居延漢簡記載の元号についての問題。出土資料を活用した問題になっておらず、また元号についての問題にもなっていないのが残念である。

問3は空欄に当てはまる人物についての4文正誤問題。

問4は中国により冊封を受けた国に関する説明文で示されている国の名前と説明文中の空欄補充問題。いずれも基本的な内容。

問5は乾隆帝とマカートニーの謁見を描いた風刺画についての組み合わせ問題。乾隆帝とマカートニーの謁見の様子を描いた絵画はこの風刺画以外にもあり、二つの比較から何が考えられるか、という出題の仕方もあったのではないか。

Cは、20世紀の国際関係についての授業を想定した設問。

問6は会話文中の空欄補充問題で、解答は容易。③については、誤りが明白であり、ドイツに関する誤りの選択肢は他にも設定できたのではないか。

問7は会話文中の二つの空欄の組み合わせ問題だが、いずれもミュンヘン会談に関連するものなので、複合的な知識を求められるものではない。

問8は対ソ干渉戦争の時期のソヴィエト政権の政策についての4文選択問題で、易問といえる。

「世界史B」について。資料や問題文を読ませ、そこから得られた情報と既習事項に関する知識の組み合わせで受験者の世界史に対する多面的、多角的な理解を確認しようとする姿勢は看取されるが、資料の読み取りで求められているのが、国語的な読解力にとどまっている設問が多いのが惜まれる。また、分析でも指摘したが、資料を活用した設問が多いため、資料の豊富な時代、地域に設問数が偏ってしまっているのが残念である。今年度は共通テストについては新型コロナウイルスの感染拡大の影響などもあり、出題側も対応に追われたことは想像に難くないが、受験者も同じような環境下で教科書にもとづき、古代から現代まで、地域の偏りなく網羅的に学んでいる。そうした受験者の努力が正しく評価される作問を今後も期待したい。

3 ま と め

今年度は、共通テストとしての初年度であり、出題方針の変更等もあって、どのような問題が出題されるのかという点において、例年以上に注目を集めたことと思われる。「世界史A」「世界史B」ともに、試行調査に見られた資料の読解を求める問題が増えた一方で、試行調査にみられた、世界史の知識がなくても資料の読解だけで解けてしまう問題が見られなくなり、より適切な出題がされたと考える。

「世界史A」について。本年度の問題も、全体を通じて基本的な知識・理解をもとに正誤文の選択や年代整序、地図や年表問題によって思考力を問うものであり、高等学校における学習内容に沿ったものとなっている。例年指摘させていただいていることが、「世界史A」の場合、教科書によって記述内容に特色があり、取り上げる事項についてもばらつきがある。「世界史A」の受験者は、専

用の用語集や受験用参考書を購入しない場合もあり、教科書のみで学習を行うことが多いと思われる。資料の読解をもとに「思考力・判断力」を問う問題は、教科書の知識に依らない出題を可能とするもので、ある意味では教科書に記載された知識量が少ない「世界史A」に向いているのではないかと思われる。かねてより各社の教科書を精査し、教科書によっては記載のない事項が解答に影響するようなことがないようにご配慮を願っているが、改めてより一層の工夫をお願いしたい。問題の配分については、近現代史を中心として位置付ける学習指導要領や高等学校における授業の時間配分にも合致した内容であり、「世界と日本の結び付き」などのように学習指導要領の主旨に沿った出題も多く見受けられた。ただ、欧米に関する出題が過半数となる一方、アフリカ史が出題されないなど、いささかバランスに欠ける構成となった。戦後史に関わるものも7問にとどまり、「世界史A」の科目の特色が活かせていない印象を受けた。

「世界史B」について。今年度の共通テストの問題は、正誤文判定問題中心、出題分野も政治史中心で知識重視の構成から脱却しようという試みがみられた。例年同様リード文が大変読みやすく、史料や会話文を多く用い、興味深い内容であり、受験者の歴史への興味関心を喚起するものが多い。今年度は平均点が54.72点と発表された。

例年指摘させて頂いているが、共通テストに求められているのは、落とすための問題ではなく、受験者の高等学校における学習活動や成果が評価されるような問題ではないか。本稿における共通テスト問題の評価もかかる視点によるものである。今年度も、ここ数年間と同様に問題の配分が学習指導要領や教科書の記述量、そして何よりも高校現場における「世界史B」の授業における時間配分に充分配慮された出題であると考えている。また、出題の形式・内容についても、全体的に奇をてらうことなく言えば「定番」とされる問題が出題されていて、高校の授業に即した、まさに「入試問題のスタンダード」といえる作題であると考えている。それゆえに高校で学んだことをきちんと理解している受験者にとっては解きやすく、勉強していない者は正答できないという良問が揃えられている点で高く評価している。次年度以降も、同様な傾向の作題をしていただくことを切に願うものである。

第3 問題作成部会の見解

世界史 A

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず、歴史的事象の意味や意義、特色や相互の関連等について、総合的に考察する力を求める。問題の作成に当たっては、事象に関する深い理解に基づいて、例えば、教科書等で扱われていない初見の資料であっても、そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題、仮説を立て、資料に基づいて根拠を示したり、検証したりする問題や、歴史の展開を考察したり、時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題などを含めて検討する。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問

第1問では、「近世から現代の国際関係」について、資料から読み取った情報と歴史的事象との関わりを考えさせることを意図した。

Aでは、ケベックの帰属問題についての知識を確認するだけでなく、文章と図の読み取りなどを通じて歴史的思考を確認する小問となっている。いずれの小問についても、識別力の面で妥当であった。

Bでは、ヨーロッパとロシアとの関係を考察した19世紀ロシア思想家の評論を取り上げ、ヨーロッパとロシアの歴史的発展に関する理解を問うとともに、ロシアと日本との関係についても確認する出題とした。

Cでは、インド民族運動の指導者が日本海軍に行った寄付に関する受領証を資料として取り上げた。いずれの小問も、正答率から判断すると容易であったと考えられる。

Dでは、ライシャワーによる「対日本政策についての覚書」を基に、アジア・太平洋地域における歴史上の出来事について理解し考えさせることを意図して作問した。

第2問

第2問は「統計資料を用いた授業」をテーマとし、授業中の会話文や資料から読み取った情報と歴史的事象とを結びつける力を問うた。

Aでは、近現代における主要国の経済に関する表やグラフを題材として取り上げた。いずれの小問についても、難易度は妥当であったと考える。

Bでは、会話文と表を基に、近世から現代までのアジアを舞台とした歴史上の出来事について考察する力を問うた。

第3問

第3問は、「世界史上の君主」をテーマとして、イギリスの議会の伝統と中国の君主の呼び名を取り上げ、資料から読み取った情報と歴史的事象との関わりを考えさせることを意図した。

Aでは、イギリスの議会における黒杖官の役割を読み取ったり、内戦・革命期の君主やイギリス連邦について考えさせたりすることを意図した。いずれの小問についても、識別力の面で妥当であった。

Bでは、中国における君主の呼び名に関する先生と生徒との会話を取り上げ、東アジアにお

ける王朝の歴史的展開と、都市に関して考察する力を問うた。具体的には、明朝の皇帝について、資料から読み取った情報と歴史的事象との関わりを考察させ、さらにそこから北京の歴史に関する出来事や作品について取り上げた。また会話文を基に、アジアを舞台とした世界史上の反乱について考察する力を問うた。

第4問

第4問は「世界遺産」をテーマとした。

Aでは、ノートルダム大聖堂についてまとめたメモを資料として取り上げた。問1は、資料を基に、ヨーロッパの建築様式について考察する力を問うた。問2は、中世ヨーロッパ社会の特色について理解する力を問うた。問3は、資料を基に、近世及び近代ヨーロッパの文化について理解する力と、歴史上の出来事について、絵画の題材と関連付けて考察する力を問うた。

Bでは、中国の万里の長城を題材として、前近代から近現代に至る東アジア地域の歴史的諸事象とその相互の関連について考えさせることを意図して出題した。問4は、会話文を基に、前近代における中国の近隣諸国と、その生活様式について考察する力を問うた。問5は、会話文の文脈からとらえた王朝名を手掛かりとして、中国における歴史上の出来事について考察する力を問うた。問6は、近現代の中国における出来事について、会話文の文脈を踏まえて考察する力を問うた。

Cでは、ローマ市について説明した文章を資料として取り上げた。問7は、資料の文脈から捉えた内容を手掛かりとして、古代ギリシア・ローマの遺産について考察する力と、近代のイタリアによる膨張政策について文脈の中で捉える力を問うた。問8は、資料を基に、歴史上の出来事の成立年代について考察する力を問うた。問9は、資料を基に、戦間期におけるイタリアの動向について考察する力を問うた。

3 出題に対する反響・意見等についての見解

第1問

第1問のAの問3は、知識と読み取りを組み合わせて正答を導く形式となっている。単純な内容で易問であったとの指摘もあったが、基本的内容の問題と評価された。識別力から判断すれば、標準的な出題内容であったと思われる。

Bの問6については、19世紀ロシアの進むべき道に関する二つの資料の主張の相違を読み解いたうえで、さらにその解説文に敷衍して考えさせようとした点において、思考・判断を問う良問と評価された。なお全体として、選択肢の正誤の根拠が、時期の適合性、命題の正否など、同一小問内で複数にわたる点に違和感も呈されたが、これは共通テストにおける新たな出題形式としては、むしろ一致させる必要はないものと判断されている。

Cでは、会話文と図を読み取らせながら歴史的用語の内容を問う問9が、良問であるとの評価を受けた。その一方で、資料そのものの読み取りから解答する問8は、容易であり工夫が必要との指摘を受けた。

Dでは、資料の読解とアジア・太平洋地域の国際関係及び関係各国の歴史知識に関する問10～問13について、細かい歴史知識を求めているとの点から難易度の高さの指摘はあったが、問13については、資料文の内容把握、設問の把握、年代や日米関係史の知識などを総合的に問う思考・判断の良問であるとの評価を得た。

第2問

第2問のAでは、問1・問2とも、資料についての各班の発表内容を読み解き、誤りがある発表内容を選ぶという新しい形式の問題であるという指摘があり、特に問1では、3班と4班

の分析は興味深く、思考・判断を問うものとなっているという評価を得た。資料からの情報と既存の知識とを結びつけ、思考力を問うという観点から、適切な出題であったと思われる。

Bでは、全体的に知識問題に偏しているとの評価を得たが、問3と問5は表の内容をしっかりと読み取る能力がなければ解けない問題であるため、大学入学共通テストの趣旨に合致しているものとする。問4については、指摘のとおりであり、今後注意していきたい。

第3問

第3問のAの問1から問3は、興味深いリード文が十分には生かされていないとの指摘もあったが、基本的内容の問題と評価された。識別力から判断すれば、標準的な出題内容であったと思われる。

Bの問4で皇帝の呼称を判断し、空欄イを永楽帝と確定させることによって、初めて問5が北京の歴史について問われたものと分かる形式であり、単純な知識問題ではないが、リード文との関連が希薄であったとの評価もあり、問い方に工夫の余地はあったと言える。問6は安禄山をあえて「節度使」として、単純に結び付けさせない点は高評価を得た。

第4問

第4問のAの問2について、資料の読み取りなどがほとんど考慮されていないとの意見もあったが、近現代史中心の「世界史A」での出題であることを意識した、細かな年代よりも中世ヨーロッパ社会の特色の理解を問う、識別力の高い問題であった。問3に関しては、絵画の背景となる歴史的事象を思考させることに成功しているとの評価もあった。

Bの問4については、知識と資料の読み取りで思考・判断を問う良問と評価された。一方、問5は空欄に入れる王朝名を考えさせた上でその出来事を問うという、共通テストにおける新しい出題形式の問題であったが、二段階の問いであり難しいとの指摘があった。

Cの問7は、写真の読み取りとともに、判別しやすい文章の組合せとの問題にすれば、思考力を問えたであろうとの意見もあった。問8は、単に年代を問う問題となってしまっており、工夫が必要であると指摘されたが、基本的な歴史的事象の時間軸上に位置付けさせる、比較的識別力の高い問題であった。

4 ま と め

以上、問題作成部会として、各問の出題意図と、設問に対して寄せられた意見・評価に対する見解を述べてきた。最後に総合的な意見・評価についての問題作成部会の見解を述べ、問題作成に当たっての留意点についてまとめておきたい。

内容やレベルともに教科書に準拠し、日常の授業で対応できる内容になっており、易問からやや難しめの設問までバランスがとれていたとの評価を得たものの、資料やグラフなどから読み取ったことを基に考察する設問よりも、知識問題の方が得点率が低いとの指摘があった。資料やグラフの単純な読み取り問題は、高度な思考力を必要としないため、今後、さらに工夫を重ねて、習得した知識に基づいて、「歴史的思考力」を働かせるような設問を増やしていきたい。意見にあるように、「せっかく資料を多く提示しても、それをほとんど生かすことなく単純な知識問題に帰結してしまう」ような問いは避けるべきであり、「資料→仮説→資料への立ち戻り→仮説の修正→叙述というプロセスを部分的であっても追体験できるような設問が望ましい。リード文や資料をきちんと読み込めば、そこに様々な思考のヒントが含まれているという出題」が望まれていることは肝に銘じたい。

出題のバランスについては、西アジア・アフリカ・中南米・オセアニアに関わる出題がなかったという指摘があったが、誤答選択肢まで含めれば、地域の偏りは小さかったと考えている。時代別では「世界史A」の指導要領・教科書のテーマに即して、近世から戦後にかけての時代に重点をお

き、古代・中世にかかわる問いは5問に抑えた。文化史からの出題が少ないのは、教科書の記述が薄いことにもよるが、政治・外交史への偏重があったことは否めない。教科書ではなじみのない事柄についても、生活史や様々な技術についての資料を提示して、考えさせる問題を作成するなどの工夫を重ねたい。

生徒と教師の会話を用いるのは、問題作成方針の基本的な考え方にある「授業において生徒が学習する場面」を意識したからであるが、対話を通じて生徒の理解が深まったり、資料の読み解きができたりする工夫が足りないとの指摘があった。今後、改善をはかりたい。

以上の指摘・意見を踏まえて、基礎的な歴史知識を生かした「歴史的思考」に受験者を導き、思考力・判断力・表現力等を測定する設問がより多くを占めるよう努力したい。

世界史B

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず、歴史的事象の意味や意義、特色や相互の関連等について、総合的に考察する力を求める。問題の作成に当たっては、事象に関する深い理解に基づいて、例えば、教科書等で扱われていない初見の資料であっても、そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題、仮説を立て、資料に基づいて根拠を示したり、検証したりする問題や、歴史の展開を考察したり、時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題などを含めて検討する。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問

第1問は「世界史上の植民地」をテーマとし、アフリカ、ヨーロッパ、東南アジアといった諸地域における植民地の歴史について考えさせることを意図して問題を作成した。

Aでは、リベリア及び南アフリカの歴史を題材として取り上げた。いずれの小問についても、識別力の面で妥当であった。

Bは、クーデンホーフ=カレルギーの『パン・ヨーロッパ論』に収録されている地図を資料として、1920年代のヨーロッパ・中東の理解を問うとともに、東南アジアの植民地、南アジアの植民地の理解について問い、ヨーロッパ統合論に植民地主義の要素が入っていることを考えさせることを意図した。全体として難易度設定は適正であったと思われる。

Cでは、ラッフルズに仕えた書記による奴隷に関する記述を資料として取り上げた。問6では、資料の要点を読み取る力と、アメリカ大陸の奴隷制度に関する歴史上の出来事について理解する力を問うた。また問7では、シンガポールの近現代史を問うた。解答結果からは、比較的解答しやすい問題であったと判断される。

第2問

第2問は、「世界史上の工業・産業の変化」をテーマとし、グラフや表などの統計資料に基づいて、歴史的事象の推移や変化について考えさせることを意図し問題を作成した。

Aでは、産業革命前後の各国・地域間での世界工業生産シェアのグラフを比較し考察させた。

Bでは、19世紀の世界における鉄道営業キロ数に関する表を資料として取り上げた。難易度は高めであった。

第3問

第3問は「世界史におけるグローバルな接触や交流」をテーマとし、古代アメリカ大陸で勃興した文明、新大陸原産の作物、スペイン王エンリケ3世の事績などに関する生徒と教員の会話を読み取りながら、それらの内容に関する知識や読解力を問うた。

Aは識別性の点で妥当な問題であった。

Bでは、大航海時代を取り上げ、ヨーロッパ内部の事象との連関、ヨーロッパを超えた同時代的な世界的な歴史事情の連関を取り上げた。問4は、大航海時代のヨーロッパの対外進出と、レコンキスタというヨーロッパ内部の国家統合・宗教状況の変化との連関を明らかにする問題であり、比較的平易な問題であった。問5は、資料から読み取った情報と歴史的事象との関わりを類推する問題であった。やや難しいが、識別性が高く妥当な問題であった。

第4問

第4問は「世界史上の指導者や君主の言葉」をテーマとし、古代ローマの皇帝、フランス大統領、朝鮮王朝の国王による著作や演説から、それらの内容に関する知識や読解力を問う出題とした。識別性の点で全体には妥当な問題であった。

Aでは、ローマ皇帝アウグストゥスの『業績録』を資料として取り上げた。問1・問2では、この資料を、古代ローマ史の知識を使って読み解かせることで、受験者の思考力・判断力を問うた。問3では、地域的に辺縁で受験者が見落としがちであるが、東西交易で重要な位置を占めた古代アラビア半島について問うた。いずれの小問についても識別力の面で妥当であった。

Bでは、シラク大統領の演説を題材にした授業中の会話を取り上げ、中世から近代にかけての西ヨーロッパにおける国際関係の展開や資料の読解力を測る出題をした。

Cでは、朝鮮で訓民正音が制定される過程を述べた資料を取り上げた。中国文化に関する知識を問う問8、西夏に関する問9は、ともに妥当なものであった。ただし、問9では識別力はやや低くなった。

第5問

第5問は、「世界史上の国際関係」について問うた。

Aの問1は、戦後の中東地域の紛争に関する事柄を、古いものから順に正しく配列させる問題、問2は、資料中の空欄に当てはまる都市がイェルサレムであることを推定した上で、その特徴を選ばせる問題であった。いずれの小問についても、識別力の面で妥当であった。

Bでは、中国に関する様々な資料を題材として、資料から得られる情報を基に関連する歴史事象を類推させることを意図して出題した。問3は、資料の文脈から捉えた内容を手掛かりとして、前近代の中国王朝に関する出来事について考察する力を問うた。問4は、資料を基に、中国の近隣国家とその統治の在り方について考察する力を問うた。資料と風刺画を基に、近代の中国を舞台とした、ヨーロッパ勢力によるアジア進出の展開について考察する力を問うた。

Cでは、会話文と挿絵を基に、ヨーロッパにおける第二次世界大戦前夜の国際関係について考察する力を問うた。いずれの小問についても、識別力の面で妥当であった。

3 出題に対する反響・意見等についての見解

第1問

第1問のAは、リベリアと南アフリカの歴史に関連する問2について、良問であるとの評価を得た。やや難しいとの意見も示され、解答結果からも二つの命題に受験者の選択が集中したことが窺えるが、従来と異なる思考力を問うという意味で、適切な出題であったと思われる。

Bは、地図とリード文を理解した上で世界史上の知識を用いる問題であると評価されており、新方式の思考力問題として過不足ない問題であった。問3は実質2択であるとの指摘があったが、そこまで絞るために知識と思考力が必要であり、適切な設問であったと考える。

Cの問6は、資料の読み取りが平易で、奴隷制の拡大に関する知識のみで解答できるとの指摘を受けた。ただし、ラッフルズの考えを問う問題となっているにもかかわらず、彼の考えがこの文章から判断しきれないとの指摘も受けた。検討課題である。

第2問

第2問のAの問2は、第二次産業革命を象徴する図版の選択問題で、これまでにない形式の出題だが、せっかくグラフを提示しているのに、読み取り問題が歴史的思考力を問うものではないと指摘が出た。複数の情報を結びつけ判断するような選択肢を選ぶことも視野に入れ、今後の課題としたい。

Bの問3は、関税同盟の性格をドイツ史の中に具体的に位置付けて考える必要があり、思考のプロセスを適切に評価することができる良問であるとの評価を得た。一方、問4については、選択肢の作り方に工夫が必要であると指摘された。この指摘を踏まえ、表記を変更することも考えられる。

第3問

第3問については、A・B共に会話形式にする必然性に疑問が呈された。学びの場面を重視するという方針でそのような形式を採用したが、今後はそうした必然性を考慮した問題作成を意識していきたい。

Aの問3は、選択肢にオランダに関する事柄を入れても良かったのではないかと指摘があった。より広くヨーロッパ全体を視野に入れた選択肢を選ぶことも視野に入れ、今後の課題としたい。

Bのリード文中のクラビホについて、それが人物名なのか役職名なのか判断に迷う生徒もいたのではないかと指摘もあったが、解答を導き出す上では支障がなかったものとする。

第4問

第4問のAは、とくに第2問が、資料の読み取りと歴史的知識を総合して判断しなければならない良い出題例であると高い評価を受けたが、問1も思考を要する問題であるとの好意的意見であった。問3は従来型に近いが、数少ない経済史関連の問題であると一定の評価を得た。いずれも共通テストの趣旨に合致する出題であったといえる。

Bでは、問5について、資料の内容と関係のない設問であるとの指摘を受けた。時代分布を考慮しつつ、より関連した作問を意識していきたい。問6は、二つの資料の文脈把握と歴史的知識を総合して答えなければならない良問であると評価された。選択肢などのさらなる質の向上に努めつつ、今後もこうした出題に取り組むべきだと思われる。

Cでは、問8は従来型の知識を問う問題、問9は選択肢と地図のみで解答できる問題との評価を得た。問9については、問いかけ方を工夫することで、より良い問題作成ができたと考える。

第5問

第5問のAは、基礎的な知識を重視した従来型の設問であるという評価がある一方で、問1は数次に及んだ中東戦争の各回について、かなり詳細かつ正確な知識を求める問題であり、また問2はエルサレムという都市名を推測した上でその特徴について考えるという思考過程を要する問題であるという評価を得た。

Bの問3は、二段階の思考過程を必要とする問題との評価がある一方で、題材とした出土資料が十分に活用されていないとの指摘があった。問4についても、風刺画から情報を読み取った上で解答するような工夫が欲しいとの指摘があった。いずれも傾聴すべき意見であり、今後、資料を利用した設問の作成において生かしていきたい。

Cについては、基本的に従来型の知識を問う問題となっているという意見がついた。問6・問7は解答に当たって、授業の会話文から時期や事項を特定することが前提となるが、改善の余地はあったと考える。各問とも、識別力の点からは、適切な出題であった。

4 ま と め

以上、問題作成部会として、各問の出題意図と、設問に対して寄せられた意見・評価に対する見解を述べてきた。最後に総合的な意見・評価についての問題作成部会の見解を述べ、問題作成に当たっての留意点についてまとめておきたい。

出題の分野および地域については、適度に分散し、難易度も標準的であって、大学入学希望者の学力を評価する問題として適切であるとの評価を得た。大問数は5、小問数は33として、共通テスト(1)とほぼ同一の問題量とした。60分の試験時間で十分対応可能であったことは、平均点が54.72点であったことからもうかがえる。資料や問題文を読ませ、そこから得られた情報と習得した知識を組み合わせることによって正答に至るような問いをすることに心がけたものの、資料を熟読せずともキーワードによって正答が連想することができる問題や、資料に書かかれていることがそのまま正答となる単純な読み取り技能問題があるとの指摘があった。「歴史的思考力」を求める問いを増やしていくことに、さらに注力したい。

問いの対象については、グラフ、写真、文章資料など多様な歴史資料を提示することに努めた。グラフや統計を使った問題においては、読み取りや解釈に基づく生徒と教員の会話により、問題を解く側の思考の方向を示すように工夫されていた点が評価された。その一方で、単純なグラフの読み取りと知識を問う設問があることも指摘された。今後、このような単純な問いではなく、深い学びを促すような設問を工夫すべきであろう。

出題のバランスについては、古代・中世史が8問、近世・近代以降が22問、時代を跨ぐものが3問であり、世界の一体化を境としてその後の時代についての設問が多かった。また、各地域に満遍なく分散していた。文化史についての設問は5問であるが、単純に作品名や作者名を問うのではなく、時代背景やその歴史上の位置づけに関わるような問いの作成を心がけた。

共通テストで思考力・判断力・表現力等を問うことが、高等学校における生徒の深い学びを促すことを期待されている。この初回の共通テストがそのような要請に応えるものであるか、いささか心許ないが、この大きな課題に向かって努力を重ねる所存である。